

# 大阪的 コミュニティの ニュースレター



Vol.1  
**春号**

発行日：2026年4月25日  
(一財)大阪府コミュニティ協会



▲4月11日のまち歩きルート案内 (写真左上から、時計周りのコース)

## わがまち自慢の基礎体力

ひと昔前、大阪の観光目的地は大阪城が抜きん出ており、「その次は？」と問われると、「さて？」と考え込んでしまう大阪人も多かったと思います。その流れが変化し始めたのは2001(平成13)年。重工長大型産業の集積地ベイエリアに、ユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開業したことや、その後のインバウンド効果で大阪全体に“新しいモデルの観光客”が大勢やってきて、今では大阪全体が“目的地化”されるようになりました。

そんな大阪で2000年、今現在も活発な活動を続けている全国屈指の“ボランティアガイドの団体”が産声をあげました。「てんのうじ観光ボランティアガイド協議会」です。(以下『てんボラ』。事務局:天王寺区民センター内)

「まち歩きガイド」には、概ね3つのタイプが存在します。よく目立つのは、①NHKの人気番組ブラタモリに代表される分野ごとの専門性が前面に出たスタイル。次に、②観光名所の拠点をガイドするタイプ。さらに、③「わがまちを案内する」ガイドスタイルです。

観光の産業化が大きな課題になっている日本では、様々な領域の専門家が①の領域に関与し活況を呈しています。②の代表格は大阪城。出会うのが難しいのは、実は③のガイドスタイルです。なぜなら、街の滋味、つまり・・・コミュニティのようなもの・・・と一対になっていなければ①や②のスタイルに頼ってしまい、「わがまち自慢の『基礎体力』」がそこなわれ、オリジナリティが失われがちになるからです。

身近な小さな旅でも、遠くを訪ねる大きな旅でも「そ

の町に暮らす人」と時を共有し、歩き、日常のコミュニティ感と抱き合わせて地域文化や歴史の話をガイドしていただくことは、簡単そうに見えてとても難しいことです。観光対応が活発化しガイド技術だけに目が向くことが多くなってしまったからです。

ところが、『てんボラ』のガイドスタイルは、長い歴史の中でごく自然に、コミュニティ感の醸成とガイド技術の向上が重ねられ、昨年11月には「25年のあゆみ」という創設25周年の冊子も発刊されました。

4月11日、筆者も『てんボラ』のまち歩きに参加しました。この日はJR西日本とのタイアップ企画。天王寺駅・公園口に集合して、慶沢園から大坂の陣・現地、さらにまち中を抜け四天王寺に至るデラックスルートです。

集合場所には、定刻前から続々と参加者が・・・どうするのかと思っていたら、「早く集まったグループごとに出発します」と案内が。

やがて、総勢36名の参加者が「それぞれのボランティアガイド」に順次案内され、歩き始めました。丁寧かつ、洗練された運営にビックリ!大満足のまち歩きが堪能できました。



『てんボラ』の活動拠点!  
天王寺区民センター

《てんのうじ観光ボランティアガイド協議会 HP》  
<https://www.tenbora.com/>

〒543-0073 大阪市天王寺区生玉寺町 7-57  
TEL:06-6771-9981 FAX:06-6774-3002  
(開館時間 9:30-21:30)



# なんでまた“大阪的”

## 大阪的コミュニティのニューズレターに贈ることば

文：橋爪節也（大阪大学名誉教授）

■ カバー写真  
若者集団「カモスマ」により、北御堂の正面階段に施されたアートな装飾

熱量の高いHOTな街、大阪。繁華街を歩くと個性豊かな店舗が賑わい、活気にあふれている。そうした現代の大阪を語るキーワードに、誰もが口にする「大阪的」は、はたして本当に大阪的なのか？

東京オリンピックが開催された昭和39年（1964）から大阪万博の昭和45年（1970）ごろにタイムトリップし、街の人に大阪を特徴づけるキーワードを聞いたら、「ど根性」という言葉がかえってくるだろう。時代は高度経済成長期、花登筐の原作になる「細うで繁盛記」（1970～1971年）、「どてらい男」（1973～1977年）などテレビドラマの商人立身出世物語が、「ど根性」による「大阪らしさ」として流行っていた。しかし、現代の大阪人であるみなさんは、自分たちを象徴する言葉として「ど根性」を選ぶだろうか。

当時にしてもそうである。アヴァンギャルドの詩人小野十三郎（1903～1996）は、昭和42年（1967）の『大阪—昨日・今日・明日—』（角川新書）で、「『大阪らしさ』という言葉に抵抗感があり、“ど根性”という言葉も本来の大阪ではない」と断じている。「わが大阪庶民にも、風俗、風習、趣味、その他万端にわたって、だれかの口車にのっているとは気がつかず、大阪ふうや大阪的であることを、みずからの必要以上に自慢したがる傾向がある」とも批判した。

小野の言葉に従えば「今風の大阪的」で濃縮された大阪人も、自ら大阪のイメージを演じているだけなのかもしれない。

この作られた「大阪イメージ」つまり「大阪的」なモノが、文化的深みを語ろうにも大阪の足かせとなって、大阪の弱点になってしまっているのではないか。井上章一『大阪的「おもしろおばはん」

は、こうしてつくられた』（幻冬舎新書）の提起した問題を踏まえ、大阪大学と（一財）大阪市コミュニティ協会では「大阪的」とは何かを2回のシンポジウムで検証してきた。

前出したように、しばらく前は「ど根性」現代は「コテコテ」・・・はたして？

そこで私が気にしたのは、大阪の人による大阪本来のメインカルチャーの扱い方に関する疑問である。「ど根性」も「コテコテ」も、大阪人のコンセンサス（常識）のように扱われているが、しかしこれらは、大衆的なサブカルチャーに根を張るものであって、文学、美術、演劇、音楽などのメインカルチャーではない。

大阪のメインカルチャーが何かを問われると、しばしば大阪人は、自分たちの街の正統な文化に対し自虐的に答える。そしてしまいには、「この街はコテコテです。モダンなものは大阪にはなじまへんなあ」とさも当然のように言い切ってしまうのである。

しかし古来より大阪は、浄瑠璃や芝居、地唄など芸能が盛んであるし、西鶴や近松、上田秋成など文豪もいる。近代では、モダニズム建築が並ぶ御堂筋や堺筋は日本を代表する都市景観であった。ユネスコの無形文化遺産に指定された和食では「割烹」も大阪で誕生した。

美術もそうである。戦後の具体美術協会は海外で評価が高く、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で大回顧展（2013年）が開催されているが、さかのぼれば江戸時代には、京派、江戸派、長崎派と並んで大坂派の意味で、大阪画壇は「摂派」と呼ばれているし、近代では船場の富商をパトロンに「公募展にはほとんど出品せずに、大阪の人々



が好む、あっさり、すっきりしたスマートな作品」(大阪中之島美術館「大阪の日本画」展図録)を描いた画家たちが活躍した。彼らを指して最近「船場派」という呼び方が用いられている。

本来の大阪文化は、洗練されたモダンさにある。大阪の正統的なメインカルチャーにこそ、都市が育んできた文化的精髓がある。それらに気づかず、成り行き面白さに突き進むだけならば SNS 全盛の時代に振り回されるばかりである。

今回、大阪の中心に伽藍を構える北御堂で(一財)大阪市コミュニティ協会などが主体となり、市民参加のプラットフォームで“芸術祭”が開催された。江戸期以来、北御堂のシンボルである大きな階段には参加型アート、屋内の吹き抜け空間にはアツと驚く船場ドラゴンなどが待ち構える。

これらは、大阪のコミュニティを新しく意味づけた「シン・センバ派、(新船場派)」と言えまいか。かくも、お洒落でモダンな、大阪的コミュニティのあらわれであろう。

### 橋爪節也

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市南区(現・中央区)生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室(現・大阪中之島美術館)から大阪大学総合学術博物館・館長を歴任。専門は日本美術史。木村兼葭堂、北野恒富、佐伯祐三など大阪ゆかりの日本を代表する文人、画家の展覧会に多く携わる。著書に「大大阪イメージ 増殖するマンモス/モダン都市の幻像一」(創元社)など多数。



橋爪節也先生によるギャラリーツアー ▲  
3月18日「北御堂芸術祭—あそべばアート」にて

### 北御堂芸術祭 あそべばアート 大西泰世の 川柳を魅せる

北御堂芸術祭—あそべばアートでは、NHK ラジオ深夜便「ぼやき川柳」の選者としてご活躍の川柳作家、大西泰世先生によるワークショップを開催しました。当日は、“アート作品”として会場に展示された大西先生の川柳作品を「見て・魅せて」味わってから芸術祭を楽しみ、参加者の皆さんも作句に挑戦しました。先生による講評のあと、秀作に選ばれた作品をここにご紹介します。選者はもちろん大西先生です!

- 懐かしい母校の側の北御堂 (江端京子)
- 北御堂喧騒よそに経流れ (乾翼)
- 春のサインくしゃみ一発花粉症 (安藤緑)
- 大道芸投げ銭の頃人が消え (奥井健二)
- 春天気スキップ踏んでラッタッター (江端兼三)

# 北御堂の“磁場”

江戸時代の国際交流と  
「北御堂芸術祭—あそべばアート—」



文：波瀬山祥子（日本女子大学国際文化学部 助教）

北御堂といえば、御堂筋の語源として知られる大阪を象徴する寺院だが、歴史のなかで人と文化が交わってきたこの場所は、江戸時代の日本美術史を専門とする私自身の研究関心と重なって、ついに昨年、博士論文を書き上げた。

この論文では、江戸時代に大坂で活躍した画家・大岡春ト【シュンボク】(1680～1763)が、北御堂に滞在していた朝鮮通信使の画員（画家）・李聖麟【イ・ソンリン】（号蘇斎、1718～1777）と、絵画制作を通じて国際交流を行い、その記録として『家彪集【かひょうしゅう】』という絵入りの書物を刊行した事例を取り上げた。

ちなみに、昨年2025年は日本と韓国の国交正常化60周年の年回りで、ソウル歴史博物館では朝鮮通信使の特別展「心のつきあい、余韻が波のように」展が開催されていた。

同展覧会には、大阪歴史博物館が所蔵・管理する辛基秀【シンギス】氏(1931～2002)のコレクションの出陳もあった。辛基秀氏は、朝鮮通信使研究の第一人者で在日コリアンとして、韓国と日本が、「誠実と信頼で交流する」ことを生涯にわたり、身をもって説かれた映像作家でもある。

朝鮮通信使とは、1607年から1811年までのあいだに12回にわたって来日した、江戸幕府との公式な外交使節である。300～500人規模の使節団は、ソウルから対馬、大坂を経て江戸に至る道のりを、およそ半年かけて往復した。朝鮮通信使の行列図を目にしたことがある人も多いだろう。

使節団には、製述官や書記など、高い学識と文化的素養を備えた人々も含まれており、彼らは公的な儀礼の合間に、日本の儒学者や僧らと漢文による筆談や詩文の応酬を行った。さらに、優れた画技を持つ画員たちは、日本の画家と絵を交換するなど、文化的交流を深めていた。大坂において、そのような交流の場となったのが北御堂であり、北御堂は朝鮮通信使12回の来訪のうち、なんと9回も、通信使の長逗留の滞在地となっている。（来航の船は外海から瀬戸内海に入り、「風待ち・潮待ち」の途中寄航を重ねながら江戸に向かう最初の目的地、大坂・北御堂に着いた。）つまり、北御堂は宗教施設という役割とともに、すでに江戸期から「人と文化が出会う創造の場」として、日本を代表する芸術交流の場であったことに気付く。《つづく》



◀ 浪花百景第70景「両本願寺」に描かれた、江戸期の北御堂・正面階段の賑わい



◀ ソウル歴史博物館

2025年6月19日 筆者撮影

## 編集室より

国をまたいだ芸術交流の歴史をひも解けば江戸期・朝鮮通信使の12回もの来航が目立ちます。この内、北御堂を宿舎にした滞在がなんと9回もあったとか・・・そこは船場のど真ん中・・・当時すでに文人画家の活躍が華やかな船場だったといえますから、人は、どんな様子で交流したのか気になります。そこで、この3月末まで大阪大学総合学術博物館で「その交流の様子」なども研究されていた日本女子大学国際文化学部 助教に就かれたばかりの波瀬山祥子先生に、その一端をご紹介していただくことにしました。全4回にわたって掲載します。

### ■編集後記

お読みいただきありがとうございます。「大阪のコミュニティのニュースレター」、記念すべき創刊号です。“まち歩き感覚”のニュースレターとして、今後も親しんでいただけたら幸いです。また、末筆ではございますが、取材や執筆にご協力いただいた皆さまに感謝申し上げます。

次号の発行は、7月下旬を予定しております。どうぞお楽しみに！

### 《編集・発行》

一般財団法人 大阪市コミュニティ協会  
大阪のコミュニティのニュースレター 編集室 編集担当・李有師【りゆうじ】

### 《お問合せ》

〒541-0055 大阪府大阪市中央区船場中央1丁目3番2-302  
✉ contact@osakacommunity.jp 代表電話：06-6125-3311



(一財) 大阪市コミュニティ協会 マスコットキャラクター  
こみびー